広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第38号　2010．3〉

「特色ある教育実習プログラム」の実施に関する研究（Ⅲ）

―「教育実習指導Ａ」及び「教育実習指導Ｂ」の効果に関する調査研究―

木原成一郎　磯﨑　哲夫　松浦　伸和　井上　　弥
伊藤　圭子　谷本　忠明　山口　武志　長松　正康
森田　英樹　田中　宏幸　畑佐由紀子　草間益良夫
横田　明子　高旗　健次　井戸川　豊　深澤　広明
松下　姫歌　池田　　隆　入川　義克　金丸　純二
時永　益徳　神野　正喜　大松　恭宏　宮里　智恵
河野　芳文　原田　良三　島本　　靖　木本　一成
三藤　義郎　竹盛　浩二　河野　　進

１．はじめに

(1)「特色ある教育実習プログラム」の実施

「特色ある教育実習プログラム」は，若元澄男他（2005）により提案され，2007年度に本格的に実施された。若元澄男他（2005）によれば，この「特色ある教育実習プログラム」の構想の背景にあった問題は，次の２点であった。第一は，教育実習に関わる科目とその履修時期に関する問題である。第二は，教育実習の実施校園に関する問題である。第一の問題の改善のために，第１年次に「教育実習入門」，第２年次に「教育実習観察」が置かれるとともに，４年生（７セメと８セメ）の「中・高等学校教育実習」が３年生（６セメ）に移行して実施されることとなった。また，第二の問題の改善のために，第４年次の「インターンシップ型教育実習」を，2006年度から教育実習部会の所掌として実施した。

(2) 研究の目的

本稿の目的は，一昨年度より本格的に実施された「特色ある教育実習プログラム」の実施に関して，「教育実習指導Ａ」及び「教育実習指導Ｂ」の効果に焦点化して報告することである。「教育実習指導Ａ」及び「教育実習指導Ｂ」は「教育職員免許法」に定められた「事前指導」に該当する。それぞれ，「小学校教育実習Ｉ」「中・高等学校教育実習Ｉ」を受講する教育学部の学生に対する「事前指導」として実施される。以下，第一に「教育実習指導Ａ」，第二に「教育実習指導Ｂ」を検討する。　（文責：木原成一郎）

２．「教育実習指導Ａ」の成果と課題

２．１　大学側からの見解

(1) 実施概要

「教育実習指導Ａ」（以下「実習Ａ」という）は，教育学部第一類の５セメの学生を対象に教職専門科目（１単位）として開設されており，本授業単位の修得が小学校教育実習Ｉの受講資格となっている。本授業の目的は，小学校教育実習Ｉに備えて，附属の小学校における教育実践の観察や討議及び実習総括を通して，学校教育への理解を深め，教育実践の基礎的能力を養い，教育者になるための自覚を深めることである。そして，その内容は三つに大別される。一つ目は小学校教育の全体について説明を聞き理解を深めること，二つ目は小学校教育の実際を観察し，授業についての理解を深めるとともに，授業実践の基礎的・基本的能力を養うこと，三つ目は学級会や児童会等の教科外活動を観察し，それに参加することを通して，教科外指導への理解を深めることである。具体的には，５月14日（木）学部オリエンテーション（大学），５月

Seiichiro Kihara, Tetsuo Isozaki, Nobukazu Matsuura, Wataru Inoue, Keiko Ito, Tadaaki Tanimoto, Takeshi Yamaguchi, Masayasu Nagamatsu, Hideki Morita, Hiroyuki Tanaka, Yukiko Hatasa, Masurao Kusama, Akiko Yokota, Kenji Takahata, Yutaka Idogawa, Hiroaki Fukazawa, Himeka Matsushita, Takashi Ikeda, Yoshikatsu Irikawa, Jyunji Kanamaru, Masunori Tokinaga, Masaki Jinno, Yasuhiro Omatsu, Tomoe Miyasato, Yoshifumi Kono, Ryozou Harada, Yasushi Shimamoto, Kazushige Kimoto, Yoshiro Mito, Koji Takemori, Susumu Kono:
An Enforcement of ‘Distinct Teaching Practice’ at Hiroshima University（Ⅲ）

20日（水）附属学校オリエンテーション（大学），６月３日（水）～５日（金）授業観察及び研究協議（附属小学校，附属東雲小学校，附属三原小学校），６月５日（金）実習の総括（各附属にて授業観察及び研究協議終了後）であった。なお，授業観察の学級は小学校教育実習Ｉで配属される学級と同じであった。

(2) 成果と課題

「実習Ａ」の成果と課題を考察するため，受講生184名を対象にアンケート調査を実施した。調査内容は，実習期間，実習時期，「実習Ａ」における満足感，さらに「実習Ａ」で学んだこと，改善点・要望を自由記述で問うた。調査時期は「実習Ａ」終了直後であり，教育学部学生支援室（教育実習担当）において回収した。回収率は97.8％であった。

１）実習期間・実習時期について

実習期間に関しては，「適切」が全体の72.8％と最も多く，「短い」が26.6％であった。このことについては「児童の実態を把握するには少し短い（５日間か一週間にしてほしい）」という要望が記述されていた。実習時期に関しては，「適切」が全体の95.3％であった。

２）オリエンテーションについて

学部オリエンテーションの有効性については，「とても有効」30.6％，「おおよそ有効」38.8％，「やや有効」26.5％であった。附属オリエンテーションの有効性については，「とても有効」56.2％，「おおよそ有効」34.3％，「やや有効」2.4％であった。自由記述における「説明が複雑であるのに，質問の時間が短い」「５コマの授業とかぶってしまう」「18生の話を聞く機会がほしい（時間割作成などに関して）」という改善点・要望に対しては今後の検討が必要である。

３）授業観察について

各附属校における授業観察の満足度については，「とても満足」49.7％，「満足」47.3％であり，ほとんど全員が満足したと回答していた。「学んだことと」として，教師としての自覚・責任・やりがい・苦労について，子どもとの関わり方についての記述が多くみられ，「実習Ａ」が教職への理解と意識の向上に寄与しているといえる。しかし，改善点・要望の中には「実習観察の観点についてもう少しアドバイスがあった方がよい」「観察録の提出を後日にしてほしい」「どこまで子どもに関わっていいかよく分からなくて戸惑った」さらに「クラス長の負担が大きい」などの記述がみられた。

４）今後の課題

上記の結果から，「実習Ａ」は小学校教育実習Ｉに向け，実習に対する意欲の喚起，さらに課題意識の明確化に有効であったといえる。しかし，授業観察の観点，時間割作成等に関する改善点・要望の記述が多くみられた。今後はこれらに対する支援の充実が課題である。（文責：伊藤圭子）

２．２ 附属学校側からの見解

(1) 附属小学校

「教育実習指導Ａ」の主たる内容は，６月上旬の連続する３日間に各附属小学校において実施される授業観察及び研究協議である。これは，９月から10月上旬に位置づけられている「小学校教育実習Ｉ」に先立って行われるものである。

「教育実習指導Ａ」での教育実習生は，本実習とも呼ばれる「小学校教育実習Ｉ」での配属学級と同じ学級に配属されるので，教育実習生にとって，これら二つの教育実習は一連のものである。そこで，ここでは，「教育実習指導Ａ」の成果，とりわけ「小学校教育実習Ｉ」の事前指導としての成果を述べることにする。

まず一つめの成果は，教育実習生の教育実習に対する心構えを形成できることである。３か月後には，この学級でこれらの児童を相手にして教壇に立つという具体的なイメージは，漫然とした授業観察を許さないものである。

二つめの成果は，配属学級の児童との人間関係づくりのきっかけを持てることである。３日間とはいえ，配属学級の児童の名前と顔が一致するぐらいにはなることができる。これは，９月からの「小学校教育実習Ｉ」に備えての大きな利点である。

三つめの成果は，「小学校教育実習Ｉ」で行う教壇実習（実地授業）の準備を進め得ることである。３日間には各教科担当教員の話を聞く時間が設けられており，教壇実習（実地授業）で扱う単元等についての情報を得ることができる。また，学級ごとに教壇実習計画の立案を求められるので，自分が，いつ（月日，校時），どの教科の教壇実習を担当するのかを，６月の段階で決定することができる。これについては，

- 日数を合わせるだけでも難しいのに，授業展開を考えての日程調整は，授業をしたことがないし分からない。
- あまりにも早すぎて，分かっていないことが多い。ただ，他校より早く見通しを持てるというメリットがあった。

という教育実習生の声もあるが，８月までの約３か月を教材研究，指導案づくり等に費やすことができるという利点は極めて大きい。

以上，主な成果を３つにまとめて挙げた。この「教育実習指導Ａ」を経ているからこそ教育実習生が「小学校教育実習Ｉ」にスムーズに入っていくことができ

ている。今後とも「教育実習指導Ａ」が継続して行われることが望ましい。　（文責：神野正喜）

(2) 附属東雲小学校

教育実習指導Ａにおける本校のねらいは，「授業の実際を観察すること。遊びや会話など，子どもとのかかわりをもつこと。これらの活動を通して，学校教育への理解を深め，本実習に向けての意欲や見通しをもち，教育者になるための自覚を高めることができるようにする。」ことである。

３日間という実習期間では，目的の後段部分「教育者になるための自覚を高めること」は正直難しい。実習後の意識調査では，「小学校授業の実際を観察した。子どもたちとかかわりあった。こうした日々の活動と本校教員との話し合いにより，本実習への見通しを少し持てた。小学校の授業とはこのようなもので，子どもたちはこんな様子だ。」といったものが多い。本実習に向けてのウォーミングアップといった印象である。

要は，この３日間の「観察」を契機に本実習，さらには教育職へといかにつないでいくかである。実習指導Ａが実を結ぶかどうかは，実習終了後が勝負どころである。

そのため，後段の目的達成をめざして，今回の実習では，「社会で通用するマナー」を具体的に厳しく指導してきた。「服装の整え方・言葉づかい・声の大きさ・廊下や階段の歩き方・姿勢の保ち方・時刻の厳守・食事の仕方…等々。」人としての資質の部分である。

学生としての「出席」とは違う「出勤」を味わい，教師（社会人）としての自覚を持たせるためである。実習生にとっては普段の生活とのギャップの大きさから戸惑いを感じた者もいたようだが，常に意識の高さを持ち続けて欲しいと願う。我々教師自身が子どもたちに与える影響の大きさに気づき，子どもたちにとってよりよい人的環境であり続けて欲しい。この点の評価に関しては本実習時に行うことが適切であろう。

さらには「学び方」についても具体場面で示してきた。「ノートやメモの取り方・質問の仕方・題材や教材の読み取り方・子どもの見取り方・発問や板書の意図…等々。」教育職に就くものとしては，基本的なことであるが，示さなければできない実習生が多いことも事実である。決して高い次元でできることを望んでいるわけではない。教師としての資質として自然にできる力を培っていきたいと考えている。本質に迫るのはその後でいい。体験しながらその力量を高めていってくれることを願っている。

今回の実習を通して「教員」とはどのような職業なのか。小学校教員の果たすべき役割は何か。どのような姿勢や考え方で望むべきなのか。「教えること」と「育むこと」の違い，バランスを取ることの重要性…等。大きく広い視野での気づきや学びを，自分の中で熟成させ，来るべき本実習・教育職へとつなぎ続けて欲しいと願う。　（文責：大松恭宏）

(3) 附属三原小学校

附属三原小学校では，６月３日（水）～５日（金）に教育実習指導Ａを実施した。この３日間，３年次生（以下，実習生）は西条から通勤しながら９月からの教育実習Ⅰにおける所属クラスに所属して過ごした。

実習生に配布される「広島大学附属三原小学校教育実習の手引き」には，本校の教育理念である「自伸会の信条」を筆頭に，校歌，３日間のスケジュール，勤務上の諸注意，実習上の組織と役割，授業や行事などへの取り組み，時間割一覧表などが示されている。実習生はこの手引きをもとにしながら，３日間を通して小学校教育の現場における教師としての仕事や役割を具体的に学ぶことになる。

この実習に向けて附属三原小学校が準備したプログラムは次のとおりである。対面式（教員との出会い），就任式（児童との出会い），指導講話（学園長・研究部・各教科担当・養護教諭・栄養教諭），指導授業参観，授業参観，全校歌の集い参観，朝の会と帰りの会参観，給食・掃除・休憩時間への参加，学級オリエンテーション，実習Ⅰにおける最初の授業担当者との打ち合わせ会，学級反省会などである。実習生は終日，慣れない学校現場に身を置きながら，早く児童や教職員との関係を築こうと必死である。また，見聞する全てのことを吸収しようと熱心にメモを取る。どの実習生の観察録もびっちり埋まる所以である。

この３日間の成果は，実習生が残したアンケート調査への書き込みから見取ることができる。

- 先生方の指導技術や児童とのかかわり合いのすばらしさにただただ感動し，「私もあんなふうになりたい」と思いっぱなしだった。
- 現場で実際に働いている先生方の話は，普段の大学の講義とはまた違った学びがあり，とても有意義だった。
- 指導授業で他学年の授業を見て，自分の担当学年・クラスとの反応の違いや年齢差による発達の違いの大きさを実感した。指導授業や指導講話を受けて，自分が授業する時のイメージがわいた。
- ９月の本実習が本当に楽しみで，早く子どもたちに会いたい。９月にはより成長して戻って来たい。

３日間という短い期間ではあるが，現場の持つリアリティは，実習生にそこで学ぶ意欲と緊張感をもたら

した。一方，アンケート調査には「もっと多くの授業を見たかった」という課題も示された。これはプログラムにかかわる本校側の課題である。いずれにしても教育実習指導Ａは，教育実習Ｉに向けた実習生のモチベーションを高める機会として大変有効であった。

（文責：宮里智恵）

３．「教育実習指導Ｂ」の成果と課題

３．１　大学側からの見解

(1) 実施概要

本年度から改善された教育実習指導Ｂであるが，目的や位置づけに変更はなく，その実施方法が変更された。昨年までは，３日間で附属中学校１校と附属中・高等学校２校で各２回の授業参観と授業に関する協議を行うことが中心であった。

本年度からは，学生は１校（中・高等学校教育実習を受講する学生は，先に行う実習校）のみで３日間行うこととした。その主たる理由は，いわゆる本実習でほとんど参観をする機会が持てないため，あらかじめ授業参観等をしたいという声が多かったことである。

本年度は６月11日に学部オリエンテーションを行い，６月17日から３日間で実施した。

(2) 成果と課題

教育実習指導Ｂの改善の成果を検討するため，実習後にアンケート調査を行った。その項目は，「教育実習の理解度」「教育実習に参加した印象」「本実習までの課題」に関するもので，それぞれ５件法でたずねた。

まず，「教育実習の理解度」であるが，項目ごとに「よく理解した」「ある程度理解した」と回答した人数ならびにパーセントは以下の表１の通りである。

表１　観察項目に対する理解度

教育目標・教育課程	249（88.6）
授業の観察の仕方	259（92.2）
教材研究の仕方	204（72.6）
授業の組立方・指導案の作成の仕方	234（83.3）
授業の進め方・指導技術	231（82.2）
教材・補助教材	150（53.3）
教育機器の使用の仕方	84（29.8）
授業での生徒への対応の仕方	203（72.3）
生徒の発達段階	151（53.8）
学級経営	56（19.9）

この表からわかるように，10項目中６項目で理解した学生の割合が70％を超えている。とりわけ「授業観察の仕方」「授業の組立方・指導案の作成の仕方」「授業の進め方・指導技術」など授業に関する項目が８割を超えていることから，概ね目的が達成できたと評価できる。「教育目標・教育課程」が高いのは，附属学校でのオリエンテーションの内容が充実していたためであり，感謝したい。

次の，「教育実習に参加した印象」については，以下の項目に対して，そう思うかどうかを５件法でたずねた。項目並びにそれぞれに対して，「そう思う」と「少しそう思う」と回答した人数とパーセントはそれぞれ次の通りである。「中学生，高校生のイメージが深まった」220（78.3％），「教育実習のイメージが深まった」258（91.8％），「教育実習に向けての準備すべきことが明らかになった」262（93.2％），「教育実習に対する不安が軽減した」91（32.4％），「教員を目指すものとして有意義だった」224（79.7％），「教職への志望動機が高まった」156（55.5％）。

この結果から，教育実習や生徒へのイメージが深まるとともに，教育実習に対する準備すべきことが自覚できたと解釈できる。「教職を目指すものとして有意義だった」が８割近くを占めており，学生からの評価も高い。一方で「教育実習に対する不安が軽減した」に対しては38.8％が「そう思わない」と答えており，意識が分かれている。

最後に「本実習までの課題」をたずねたところ，４分の１を超えたのは，「教育内容や教材研究」206（73.3％），「授業づくり」（38.8％），「学習指導案の作成過程」102（36.3％），発問や板書などの指導技術」79（28.1％）の４項目である。これらは理解度が高い項目と一致しており，理解できたことほど課題となる，という興味深い結果となった。

課題としては，やはり３日間という短期間であるためか，教科指導の観察が中心となり，学級経営などの理解が十分でないことを挙げることができよう。

（文責：松浦伸和）

３．２　附属学校側からの見解

(1) 附属中・高等学校

本年度の「教育実習指導Ｂ」は，１年次の「中・高等学校教育実習入門」，２年次の「中・高等学校教育実習観察」に続く教育実習プログラムの一環として，教育実習を間近に控えた３年生を対象に６月17日（水）～19日（金）の３日間で行われた。それまで別々の附属で１日ずつ行っていたものを，連続３日間，同一附属学校で指導を受けるという新しい実施形態が本年度より導入された。

本校では117名の学生がこれを受講した。そのうちの97名が「中・高等学校教育実習Ｉ」を本年９月に本校で受講する学生であった点からしても，まさに教育

実習の前哨戦というべき位置づけの指導であった。したがって，多くの教科では９月に指導を予定している学生を担当教員が直接指導することとなった。

具体的な指導の内容や形態については，各附属学校に委ねられていた。新しい試みでもあり，基本的には各教科の主体性を尊重した。初日の第１限の全体オリエンテーション，第２限の各教科のオリエンテーション，そして第３限以降は各教科に任せた。その主な内容は，本校教員による授業の観察，その授業の研究協議，学生による模擬指導案の作成，あるいは本校教員による学生への講義などであった。どの教科も３日間の日程に空き時間はなく，非常に充実したプログラムであると同時に，学生にとっても教員にとってもかなりハードな実習指導であった。

学生のアンケートに現れた満足度は非常に高いものであった。「満足」と「ほぼ満足」を合わせると，実に94.6％にのぼった。自由記述の中には，「大学の講義では学べないことを多く学んだ」，「指導案の改善点などの指導を受けることが出来た」，「（本実習に向けて）やる気が出た」，「少し自信がついた」，など前向きな記述が多かった。

また，本校教員のアンケートにも，「充実した指導ができた」，「９月の実習に向けて前向きに取り組んでいた」，など好意的な意見があった反面，「３日間は負担が大きすぎる」，「評価を出すのにかなり困難がある」，「大学教員のかかわりが不十分」などの厳しい指摘もされている。

教育実習を担当する附属学校の使命は十分に認識しながらも，教育実習の理想的な在り方を模索する努力が大学と附属学校の双方に求められていることを再認識させられた。（文責：原田良三）

(2) 附属東雲中学校

本校においては，教育実習指導Ｂの具体的な目標を「学習指導案作成の手順と要件をつかむ」「本実習に向けて指導者としての心構えをもつ」の２点に重点化・焦点化した。指導教員10名から①観察実習生の態度や意欲，②指導の実際，③現行教育実習指導Ｂの改善点についてアンケートした結果は，次の通りである。

観察実習生の態度や意欲については，本実習までに身につけておくべき知識・技能，態度などを自覚するうえで，「熱心にメモをとり質問していた」「適度な緊張感をもち，多くのことを見聞しようとする姿勢が感じられた」「本実習を見据えて観察していた」など，肯定的な回答が全員の教員から示された。態度に関する大学での事前指導が，適切に行われたものといえる。

観察実習生に対する指導の実際については，指導できた，あまり指導できなかったとの回答がそれぞれ５名となり意見が割れた。「実際の授業を見せることで，授業のつくり方の指導ができた」「授業に関する質疑応答を通して，指導者の思いや考えを伝えることができた」など有効性を認める一方で，「日常の業務の中でじゅうぶんな時間がとれなかった」「校務のとても慌ただしい中で終わってしまった」などの所感が寄せられた。実習期間中における本校の日程について，実習指導の時間確保を踏まえた検討と改善が必要である。

この教育実習指導Ｂシステム自体については，現行のままでよいが７名，改善を要するが３名であった。「学校現場の様子や生徒の状況を把握しておくことは大変意味がある」「本実習に向けて打ち合わせができる」「３日間はちょうどよい」など，肯定的な意見が目立った。しかしながら，「何を目的に参加しているかを理解しているかどうか疑問である」「この実習で授業観察しなくても本実習でできる」「本実習に活かされたところがあまり見られなかった」などの指摘も見られた。また，改善点として「大学で何をどのように事前指導しているかを知らせてほしい」「事前に実習生自身のモチベーションを高める指導が必要である」「どこまで指導するのかはっきりさせてほしい」などが挙げられた。これらの回答からも，教育実習指導Ｂにおける具体的な目標を観察実習生と指導教員が共有し，何のために，何をどこまで教え・学べばよいのかを一層明確に示すことが重要になるものと考える。

この教育実習指導Ｂの教員養成プログラム全体における系統的な位置づけ，客観的で具体的な到達目標の設定，各教育実習プログラム固有の教え・学ぶ内容の明示など，大学と附属学校で検討しながら，今後ますます充実した教育実習プログラムに変化・発展させていきたい。（文責：島本靖）

(3) 附属三原中学校

観察実習生を受け持った教員に対して，どんな成果や課題があったか，聞き取りを行った。それらを整理すると次のようになる。

１）実習Ｂの内容

附属三原中では，本年度は３日間の実習Ｂの内容を試行的に次のように３分類し，実施した。

〈観察Ⅰ〉　教科等を指定しない自由な授業観察
〈観察Ⅱ〉　専門教科の授業観察
〈観察Ⅲ〉　配属学級の教科外の授業観察

観察Ⅱ・Ⅲについては，観察する授業を指定し，授業後に協議会を実施した。また，観察Ⅱについては，事前に各自が当該授業の指導案（略案）を作成して臨むことと，本実習（９月実施の中高実習Ⅰ）の計画と

準備を行うこととした。

２）実習Ｂの成果

昨年度までの観察実習と比べて実施期間が延びたことは，観察する対象が増える，異なる場面での生徒の変化を見る機会が増えるなど，実習生にとって得るものが多かったようである。実際に，授業後の協議会では従来の観察実習ではみられなかった多岐にわたる意見や質問があったという。その中でも顕著なものは次のようなことである。

〈生徒理解〉実習生にとって教室の雰囲気や生徒の反応は最も大きな関心事の一つである。個々の生徒の特徴をとらえるとともに，その言動の背景や原因を探ろうとする姿勢が見られた。

〈指導法〉指導教員の授業観察の機会が増え，指導法の細部にわたって言及するようになった。授業スタイルの特徴を理解し習得しようとする面もあった。

〈本実習への効果〉本校での実習Ｂの経験者と非経験者とでは，本実習における精神的なゆとりの面で大きな違いが見られた。本実習の授業が優れているわけではないが，生徒の想定外の反応にも落ち着いて対処するなど，実習Ｂでの経験がいきていることが分かる。なお，観察（６月）から本実習（９月）までの準備期間にゆとりがあって良かったという意見もあった。

３）実習Ｂの課題

最も大きな課題は次の２点である。

〈観察Ⅱと観察Ⅲの調整〉実習Ｂの主要な内容は，教科指導の観察（本校でいう観察Ⅱ）にある。生徒理解を深める目的であえて観察Ⅲを設定したが，それによって観察Ⅱの時間が少なくなる，二つの協議会の時間調整が難しくなるということになった。

〈実習Ｂと本実習の関連〉単元や教科指導における専門的な知識・技能の面については，実習Ｂから本実習への変容はほとんど見られなかった。

（文責：木本一成）

(4) 附属福山中・高等学校

中・高実習Ⅰ・Ⅱに向けて，事前指導としての初めての３日間の教育実習指導Ｂであった。

１日目，１時限目は出勤確認と資料配布。２時限目は全体オリエンテーション①として副校長による「学校紹介」。３時限目は全体オリエンテーション②として実習係が「教育実習Ｂを受ける心構えと諸連絡」，生徒指導係が「生徒指導に関する諸注意」を。昼食休憩をはさんで４～６時限目は教科単位で「教科指導①～③」。放課後は実習係の説明を聞きながら実習記録を整理し，退勤。２日目も１時限目は出勤確認および諸連絡。２～５時限目は教科単位で「教科指導④～７」。６時限目は全体オリエンテーション③として教務係が「教育課程について」，研究部が「教育研究について」を。放課後は初日同様。３日目も１時限目は同様に。２～５時限目は教科単位で「教科指導８～１」。６時限目は実習係によって「実習Ｂを終えて」として総括。最後に実習記録を整理し，退勤とした。

福山附属のこのプログラムは，「教育実習Ｂの意義と心構え」を確認し，「学校教育への理解」を深め，実習校の実際について理解させ，その上で各教科の「授業観察の方法」を学びながら，本実習に向けての方向付けや目標設定を促すものである。教科ごとの指導だけにならないように「全体オリエンテーション①～③」を設けた。とはいえ中心はやはり教科指導。これに関し，特に「教科指導①」は，「教科指導ガイダンス」「授業観察の視点」「教材研究の方法」など，教科ごとに工夫を凝らして開始し，以後②～１で「授業観察」「指導案の再現」「協議・討議」を繰り返し，最後にまとめの「協議・討議」を置いた。

附属の教員からすれば，３日間となって個々の実習生と向き合う時間が増え，特に指導案の書き方について丁寧に説明でき，目的は達成された。実習生は，授業の目的と授業の実際のつながりについて，自分のこととしてイメージでき，具体的な課題を見つけることができたと思われる。実習生におけるその成果・変容については，これを個別に把握する営みがもう一つあるべきであり，そうしてはじめて事前指導は意義を持つ。

（文責：竹盛浩二）

４．おわりに：「教育実習指導Ａ」及び「教育実習指導Ｂ」の成果と課題

４年間という限られた教員養成期間において，特色ある教育実習をどのように配置し，意義ある教育実習とするか。この課題に対する一つの解決方法が事前指導に位置づけられる「教育実習指導Ａ」と「教育実習指導Ｂ」の工夫改善である。本年度から本格的に実施された「教育実習指導Ａ」と「教育実習指導Ｂ」は，従前のそれらで見いだされた諸課題を克服し，より「事前指導」にふさわしいシステムへと再構築した。

もちろん，従前からあった課題が必ずしもすべて克服された訳でもなく，一つの附属学校で連続する３日間の実習であることから教育実習生と附属学校教員の両方に負担となったことも事実である。しかしながら，実習生へのアンケート調査結果や実習録などや附属学校教員の総括を勘案すると，新しいシステムでの「教育実習指導Ａ」と「教育実習指導Ｂ」の目的はおおむね達成され，これまで以上に効果的な実習であったと言ってもよいであろう。とりわけ，実習生と附属学校

教員とのコミュニケーション，及びその後に続く本実習との連続性（実習Ｉの９月実習）といった視点からすれば, このシステムそのものは十分に有効であった。

一方で，課題も再認識された。それは，１年次生から３年次生まで配置されている各種教育実習との整合性である。個々の実習がそれぞれの目的を有するのは当然のこととして，少なくとも広島大学教育学部・附属学校で育成すべき教師像を明確化し，それを基盤として教育実習システムを再構築することが今後のもっとも大きな課題であろう。　　（文責：磯﨑哲夫）

参考文献

若元澄男他（2005）「広島大学における『特色ある教育実習プログラム』の構築に向けて」,『広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第33号2005.3, pp.31－40